キャラクター名
Applaudissement（アプロディスマン）

プレイヤー名

シンドローム	サラマンダー ソラリス	ワークス	ﾚﾈｹﾞｲﾄﾞﾋﾞｰｲﾝｸﾞC	カヴァー	使用人
オプショナル		年齢	?	性別	男
覚醒	感染	衝動	加虐	初期侵食率	29 %
出自	冬眠	経験	生命停止	邂逅	主人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2	0	0			2
感覚	0	0	1			1
精神	2	1	2			5
社会	4	0	0			4

HP	29
行動値	7
(非装備時)	7
戦闘移動	12
全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	4		交渉	1	
回避			知覚	1		意志	1		調達	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
「荊」（ｺﾝｾ+氷の塔）	ＲＣ	8r+4		3		ｺｽﾄ7/C値8/範(選)/同ｴﾝ不可/D10+3
「荊の塔」（ｺﾝｾ+氷の塔+ﾄﾗﾝｷﾘﾃｨ）	ＲＣ	12r+4		3		ｺｽﾄ10/C値8/範(選)/同ｴﾝ不可/HP-5/D10+3
		0				
「零下の塔」（ｺﾝｾ+氷の塔+ﾄﾗﾝｷﾘﾃｨ+ｵｰﾊﾞｰﾄﾞｰｽ）	ＲＣ	15r+4		12		100↑/ｺｽﾄ14/C値7/範(選)/同ｴﾝ不可/HP-5/ｼﾅﾘｵ3回/D10+12

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：噂好きの友人	
コネ：UGN幹部	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	ﾀｲﾀｽ	消費
究極のゼロ《ｱﾌﾞｿﾘｭｰﾄ・ｾﾞﾛ》	P	N		
庭園	P 好意	N 隔意		
研究者	P 懐旧	N 無関心		
主人	P 誠意	N 食傷		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 12	残り財産P： 10

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
ﾋｭｰﾏﾝｽﾞﾈｲﾊﾞｰ	1	-	常時	至近	自身	自動	RB	
効果：衝動判定のダイス＋Lv個								
ｵﾘｼﾞﾝ：プラント	1	2	ﾏｲﾅｰ	至近	自身	自動	RB	
効果：シーン中【感覚】達成値+LV*2								
ｺﾝｾ：ｻﾗﾏﾝﾀﾞｰ	2	3	ﾒｼﾞｬｰ				D口	
効果：判定のC値-LV（下限7）/D+3個								
氷の塔	1	4	ﾒｼﾞｬｰ	視界	範(選)	RC	-	
効果：攻撃力LV*3射撃攻撃/同エン不可								
トランキリティ	3	3	ﾒ/リ			精神	-	
効果：判定D+[LV+1]個/HP-5								
オーバードーズ	2	4	ﾒ/リ			ｼﾝ	100↑	
効果：組み合わせｴﾌｪｸﾄのLV+2/ｼﾅLV回								
氷の回廊	1	2	ﾏｲﾅｰ	至近	自身	自動		
効果：飛行状態で戦闘移動。移動距離+[LV*2]m								
隠し味	★		ﾒｼﾞｬｰ			自動		
効果：化学物質により食事の味を向上。栄養価は変わらない								
元気の水	★		ﾒｼﾞｬｰ			自動		
効果：栄養満点の水を作り出す。								
快適室温	★		ﾒｼﾞｬｰ			自動		
効果：シーン内の気温を快適にする。								
効果：								
効果：								
効果：								

とある洋館に使える使用人。
Applaudissementという名は当代の当主から名付けられた。
普段はアプロディスと呼ばれている。
何代も前の主から仕え続けている、冷静沈着で氷のような男。

実態は希少種の薔薇のレネゲイドビーイング。UGNの研究室に保管されていたが、主から買われてそれ以来お仕えしている。
特技は庭園の手入れ。
彼の淹れる紅茶は絶品だが、その反面料理は壊滅的であり、
レトルト食品をめちゃくちゃ綺麗に盛り付けしてフルコースのように見立て、イージーエフェクトの「隠し味」と「元気の水」でごまかしている。
何年も凍結保存されていたので暑いのが苦手。

PC②　ワークス：指定なし　カヴァー：使用人
ロイス：PC①　P：誠意／N：食傷
キミはオーヴァードで、PC①に仕える“使用人”である。主人の付き添いで“アメーリア・リリィ”の屋敷に赴くことになったキミの耳に入ってきたのは、リリィ家に関するよくない噂だった。